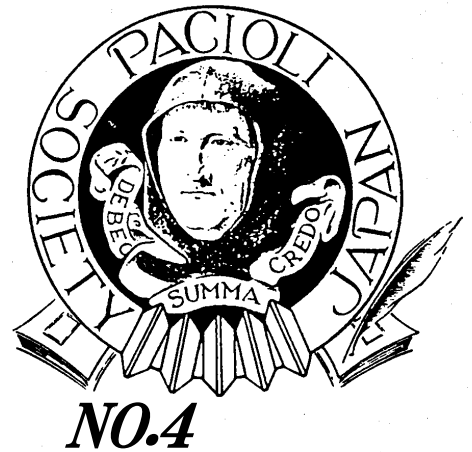


Accounting, Arithmetic & Art Journal



The **P**ACIOLI **S**OCIETY **J**APAN

1993. 05

第三回フォーラム開催のお知らせ

平成5年6月12日(土)午後2時から大東文化大学板橋校舎にて、江村 稔先生をお迎えして「No Royal Road」のご講演をいただきます。エメット・ティラーのパチョーリ研究に付けられたタイトル、どんなエピソードを語られるか、興味の尽きないところです。ひき続いて開催する懇親会にも奮ってご参加ください。

「モナリザを描くダ・ヴィンチ」その後

本誌前号(No.3)にて「この絵の行方を知りませんか?」とお尋ねしたその後について、明らかとなったところをご紹介します。故小島男佐夫教授が「イタリアの錦絵」と称されていたように、原画があってその多色刷りの複製品(リトグラフ?)が宮田喜代蔵博士所蔵の作品だったようです。この絵(60×42 cm)はユーメ・プリューヌ=パジェス原画、ポール=プロスペール・アル版画による1845年の作品で、パリの国立文書館(the Bibliothe que Nationale de Paris)に現存するそうです。ルカ・パチョーリが若者と連れ立って、ダ・ヴィンチのアトリエを訪れている光景に違いないのですが、その若者が誰であったかについて、意見が分かれるところです。文書館の説明書きは当時21,2才となるラファエロ・ダ・ウルビーノである(Raffaello Presented. to Leonardo Painting Monna Lisa)と、他方、宮田先生の絵を見た平井泰太郎先生はウルビーノの若き貴公子・グイドバルトだと想像したわけです。

モナリザの完成は1504~05年とされ、パチョーリ師(1445~1517)は60才となろう。ダ・ヴィンチ(1452~1519)は7才年下の53,4才であるはずだが、描かれた師はそのダ・ヴィンチより若く、30~40才代にみえる。ウルビーノ侯(1472~1508)は同郷に生まれたラファエロ(1483~1520)より11才年上である。絵画の若者は15,6から22,3才にしかみえず、ラファエロに相当する歳であって、ヴァザーリ(1511~74)の著作にも当時彼がダ・ヴィンチやミケランジェロの評判を聞き、フィレンツェにむかっていると記述している。後世の作者がその逸話を題材にして描いたものであろうから、あまり厳格な時代考証はせずに鑑賞すべきかもしれないが。

なお、神戸大学の三浦伸夫先生にお骨折りをいただき、在京の宮田先生のご息様にお伺いすることができたが、この絵画の所在は不明とのことで、残念な結果に終わりました。



会計の祖としてのルカ・パチョーリ

On LUCA PACIOLI as Patriarch of Accounting

中央大学 中西 旭

は し が き

平成4年11月28日、日本パチョーリ協会のフォーラムで講演した内容の摘要を、それに引続く熱心な質疑応答を配慮した加筆を含めて、以下に成文化する。

序 会計というもの

この世には産業その他の事業が千差万別に存在し、それぞれ経済上の維持ないし発展が要請される。その合理的な運営のために、会計が不可欠である。これにより、その経営体に秩序ある統制をもたらさる。

ここに、会計とは何であるか。周知のところでされるが、なお、代表的な米国からの定義を参考に掲げて見る。

戦前、AIA(のちの AICPA)の“ARB”1941年の定義に曰く、

Accounting is the art of recording, classifying, and summarizing in significant manner and in terms of money, transactions and events which are in part at least, of a financial character, and interpreting the results thereof.

戦後、AAAの“ASOBAT”1966年の定義に曰く、

ACCOUNTING: the process of identifying, measuring, and communicating economic information to permit informed judgment and decisions by users of the information.

すなわち、the art(芸能;技術)と言い、the process(手続;方法)という、いずれも、金額上の処理および表示の仕方である。そこに、少なくとも主要な基礎として、簿記がある。

近代は、ことにルネサンス以来、諸事業の経済的活動も拡大された。したがって、その会計も組織的な簿記が求められる。1494年、ルカ・パチョーリが公刊した『SUMMA DE ARITHMETICA, GEOMETRICA, PROPORZIONI ET PROPORZIONARITA』の第9編(Tractatus particularis de Computis et Scripturis)が開示する「複式簿記」の原理が、その要請によく応答し、今なおますます広く適用されている。よって、従前から、国際的にも、その著者を「会計の祖」として尊敬してきた。もともと、米国などでは、“Father of Accounting”(会計の父)との表現も多い。キリスト教義として、神は「天に座す父」だからである。しかし、このドグマに拘らなければ、「父」よりも「祖」又は、大和言葉の「おや」という表現が一そう適切とされよう。

I 「会計の祖」の故郷

ルカ・パチョーリの生涯および業績については、従来、欧米の学者たちによる熱心かつ綿密な調査があり、その論説も数多く発表されている。しかも、彼の生れ故郷であるイタリア国、タスカナ(Toscana)州、アレツォ(Arezzo)県のサンセポルクロ(Sancepolcro)市に私が訪問すること3度(昭和47年、48年と53年)、そこで得られた資料により、さらに補足されるべきものがあつた。

この故郷は、イタリア半島の地図のほぼ中央、アペニン山脈の嵐気ただよう麓にあり、今もなお、堅固かつ綺麗な城壁に取囲まれた、人口2万未満にしては古色蒼然たる寺院が多く(教会16、修道院6ほど)、静かな雰囲気をもつ町である。その名称、サン(聖)、セポルクロ(墓)は、10世紀のころ、エレサレムからの巡礼が一聖者の遺骨を埋めたことに由来するという。ルカ・パチョーリは、この宗教色の濃い村に1445年に生まれたが、その死亡は、1515年以降、全く不明とされていた。

しかし、サンセポルクロ市民図書館には、この偉人の逝去時点を論究した当地方の一学者の著述、D.Ivano Ricci, “Fra LUCA PACIOLI, L'UOMO E LO SCIENZIATO”, 1940があつた。

それは、今もその北部に存在するサンセポルクロ修道院から発行の当時の公文書類の調査により、彼の生存が確かめられる文書の最近日付が1517年4月15日であり、「故ルカ師」等と逝去を示す簡書の最古日付が1517年10月20日であることから、その死亡はその中間にあり、と勘定してある。また、その図書館の検索カードにも、すでに、“Luca Pacioli, 1445~1517”と明記してあつた。よって、このイタリア語の原

著は邦訳して出版させた(『ルカ・パチョーリの生涯』、日本ミロク票簿、昭和52年)。さらに、その正確な没年を邦文にも発表し(「再びルカ・パチョーリ遺跡を訪ねて」『会計』昭和49年4月号)、また、英文にも報告した(“On the Life of Luca Pacioli”, *Accounting Historians Journal*, Fall 1979)。

さらに、この故郷への第3回訪問のついでに、当市修道院をも統括するタスカニー州大修道院に立寄り、その所属修道士の過去帳の閲覧の便宜を計ってもらった。この台帳の「ルカ・パチョーリ司祭かつ教授」の箇所に「1517年、サンセポルクロ(逝去)、6月19日没」と手記されてあった。それは比較的新しい帳簿出あるので、その基礎資料を求めたが、すでにその担当係は逝去して不明と答えられた。だが、当会の正規の記録としての構成は貫かれる(「ルカ・パチョーリの逝去の時点」『会計』昭和54年8月)。

これらに対して、最近発表されるルカ・パチョーリに関する欧米からの学術論文の多くにも、また、当教会員たちに届けられたシアトル大学の新作ビデオ、“Luca Pacioli—Unsung Hero of Renaissance”にもその没年は1517年と表示ないし明言されている。

なお、ルカ・パチョーリの墓所については、まだ問題が残る。通常、カトリック修道僧が死亡すると、その遺骨はその所属の祭壇の床下に埋葬される。それゆえ、彼がかつて住んでいたサンセポルクロ修道院の案内係は、問えばかく応えた。しかし、ルカ・パチョーリには、遺言書が残されており、これも邦訳してもらった。(『原文対照—パチョリ遺言書』ミロク経理、昭和48年)。原則として、修道士の所有物はその修道院にすべて所属する。しかしだから、この数学教授をかねた司祭だけは、1508年ローマ法王ユリウス二世の特別の許可を得て、その遺産を自分で自由に処分することができるようになった。大学等での講義料収入が多かったようである。その残存する最後の遺言書は、1511年12月21日付であるが、彼の現住所であるサンセポルクロ修道院の「院長および修道士たちのために50フローリンを支払うことを希望」して曰く「上記の教会に一つの墓をただちに義務として建立することを希望する。その墓は、教会の適当な場所に位置し、大きな石から成り、その墓石の上には、同じ修道院の肉親上の三兄弟、すなわち、甥のファジネペロと修道士アンブロジオ、そして、遺言者の肖像が慣例通り彼らの碑銘と共に置かれることを希望する」と。しかしながら、すでに実地調査の結果、この修道院及びその周辺にも、このような別な墓は見当らなかったのである。1517年の10月20日付の当院長から聖フランシスコ会長あての公文書に、「故ルカ師の甥の二人(上記のシネペロとアンブロジオ)の哀れな兄弟たちが同僚たちを侮辱した旨の訴えが記録されてある。

上記の遺言書は更に続けて曰く、「上記の修道士たちと院長が、上記の条項を一つでも背くようなことがあった場合には、上述の人たちも修道院も、その(多額の献金の)相続権を失い、その代わりに、貧者の援助のための当村の『聖アントニオの虐げられた者』病院を相続人と立て、上記のカリウスと墓の義務を負わせ、その墓の費用を12フローリン支払うことを希望する」と。しかも、その慈善病院の跡地にも、その墓石は見付らなかった。

これに対し、この数学者はローマその他からの招待も多く、その遠隔地で客死したのではないかとの仮説も、欧米の著書にみられる。しかし、その場合も、彼の厳密な遺言書に基き、多額の献金により立派な墓を建立されてあるべく、しかも、すでに世界的な著名人ゆえ、その土地の住民が宣伝に乗りだす筈であろう。それらの意見に対して、サンセポルクロ市民の間には、彼の祖先たちが埋葬されてある当市南部の聖ヨパネ教会の床下に、その遺骨を親戚たちに引取られて永眠したのであろう、との返答も多い。たしかに、彼のこした二つの遺言書とも、その祖先たちへの供養への希望も熱烈である。そして曰く、「聖ヨハネ教会に銀貨5デナリオを寄贈して、自分とその先祖たちの霊魂のために、その遺言書自身が意図した日から5年間、毎日一つのみさを捧げる義務を負わせた」と。しかし、今は、その教会は無く、その跡地に倉庫が立っていたが、墓石は見当らなかった。結局、その厳密な地点については、未解決のままである。

すでに承知のところとされるが、ルカ・パチョーリは、15才のころより、同郷の資産家に丁稚奉公し、やがて遠近画法の大家フランチェスカ(Piero della Francesca)に師事して特に数学に精進し、19才からヴェニス商人の家庭教師都なり、6年後、フィレンツェの貴族アルベルッチ(Leon Batista Alberti)に導かれ、そのローマの邸宅にて、沢山の文化人と接触し得た。しかし、1472年4月、この親方の逝去に直面し、この学究肌の青年は、カトリックの聖フランシスコ会の修道院入りを決意した。

この修道会(Ordo Fratrum Minarum)は、13世紀からアッシジを始め彼の故郷にも設立され、清貧に徹し説教に務める行者たちから成る。しかし、当(15)世紀には、現世の開発に寄与することも神への奉仕と

して尊重する穏健派、コンヴェントゥアル(Conventuali)が会則への厳格派(Mineri)に対して優勢となっていた。それゆえに、現実の才能を発揮することが、伝統へ地位がなくても、この聖域からは比較的容易であった。これに対して、奇態なカプチン派(Captini)その他が、元来の穏健主義徹底を回復させたのは、彼の没年(1517)以後のことである(「ブリタニカ国際大百科辞典」1974、等参照)。

はやくも、1475 年には隣の州にあるペルーシア市の大学の数学の講師を引受けていた。これは、この若き修道士が早くも司祭に叙せられていたればこそ、対外活動を許された。その後も、ローマ、ミラノ、ボロニア、フィレンツェ、ナポリ、ピザ、等の大学からの招聘が相継ぐ。当時は、もとより自動車などはなく、それぞれ、その地域の修道院に起居したのであろう。その間、ダ・ヴィンチ(Leonard da Vinci)その他、その地方の著名人と交流も、諸記録に残存する。また、彼は、「スママ」に限らず、学術上の諸著述を現代語で表示し、ヴェニス等で出版した。民衆への啓蒙を目指したからであろう。これらの俗世間活動も、聖フランシスコ会本部の容認ないし支持があった、と判断される。1504 年5月、この本部から、彼はタスカニ州の北隣、ロマニア州の管区長に任命された。その翌年、その僧籍をフィレンツェの聖フランシスコ会修道院に所属替えした。

彼の郷里、サンセポルクロは奥地あって、1492 年、師フランチェスカの葬儀に、また、その前後の年に、その修道院に立寄った記録は残存する。ついに、1510 年2月、聖フランシスコ会本部より、サンセポルクロ修道院のコミサリオ(commissario)に任命された。この職は、わが国では「委員長」などと訳されてあるが、院長以上の権限をもと常任監督で、「総長代理」と称せられるべきである。その赴任当初は、この現地の修道士たちの反抗が会ったが、やがて治まったことが、当院の公文書に認知され得る。遠地の大学での講座担当は、なお、続いた。ペルーシアに、ついで、ローマにも重ねて赴任したとされる。しかし、1515 年満 70 才以降は、この閑静な郷里修道院内で悠然と法悦に浸り自適していたと、テイラー教授たちと共に早くより推測される(Emmet Taylor, "No Royal Road — Luca Pacioli and His Times", 1943, P.399)。彼の高德は、当修道院当局の 1517 年4月 15 日聖フランシスコ総会あて「ルカ・パチョーリ神父とアッシジの管区長として選出していただきたい」との昇格推薦文にもその指摘をみる。

この郷里サンセポルクロでは、同郷出身の偉人としては、画家フランチェスカの方が早くより表彰されていた。生前すでに近辺諸都市からもその作品に対する鑑賞が大きく、その没後間もなく、その住宅も記念物として、保存され、また、銅像も立てられていた。これに対し、僧侶パチョーリは、近代文化、ことに会計への文献顕著であることの名声は諸外国から輻輳されてきてから、この僻地での尊敬が高まってきた。1878 年に建てられた彼の記念胸像に「370 年の忘却を恥づ」と刻まれてある。しかし、今や、当市に「パチョーリ通り」も設定され、「パチョーリ〇〇学校」も2種建立され、また、図書館に彼の文献収集の努力も顕著にみられた(「ルカ・パチョーリの生誕地遺跡」『会計』昭和 28 年5月号)。戦後、当市の名誉市民として、第一回は、デラ・フランチェスカの業績顕彰者が、第二回目は、ルカ・パチョーリのそれで、昭和 53 年に図らずも外国籍の筆者が選ばれた。しかも、その顕彰不足がいまだ痛感されている。

II 「複式簿記」の根拠

近代は、現実視、聴き、触れる領域が、ことにルネサンス以来、著しく開発された。よって、特にヨーロッパでは、「世界の発見、ことに、人間の発見」と誇られた。たしかに、地上の日常生活は、ますます便利な物資と豊かな情報が提供される。また、住民各位の個性発揮の機会が拡張された。そのこと事態は、もとより慶賀されるべきである。しかし、個人あつての社会であると共に、家庭・国家などの共同社会ないし自然あつての固体である。その配慮が薄く、全般的な不安が濃く深まりつつある。いよよ、道義にすたれ、慣習もかわり、ついに「文明の没落」に至ることすら真面目に聴かれつつある。それは、視られ聴かれ触れられる存在—それは、すべて時間も空間も有限であり、 ∞ (無限大)からは0に等しい—にとらわれ、それらをあらしめてやまないもの(生命・産)の根源を忘却したからである。しかしながら、ルカ・パチョーリの「スママ」は、それを無視しない。

絢爛たる現代文明は、科学の発達に基づく機械化さらにエレクトロニクス化に負う所が大きい。その自然科学の理論は、18 世紀、ニュートンにより体系化されたが、今世紀初等にアインシュタインの相対性原理に超克され、さらに、ボーア・ハイゼンベルグの新量子論等に昇華されてやまず、その画く世界像も、物理学のそれとは、全く夫々異なってしまった。また、文化諸科学も、たとえば、経済学は、アダム・スミス

が18世紀に樹立したが、やがて、マルクス、ケインズ、等々の諸学説に飛躍され、その進歩と共に、その基礎から変革されてきている。しかるに、かの「スムマ」の指示する「複式簿記」は、いま最も発達した企業会計、公益企業会計および公会計、等においても、その原理適用がひろく肯定されている。その公表から500年たった今でもこれは変わらないと誇示される、この簿記の「基本枠(the basic framework)」(Brown & Thonson, “Pacioli on Accounting”, 1943)、ないし「原型 (die Urtyb)」(B.Pendorf, “Geschichte der Buchhaltung in Deutschland, 1913)に留意されるべきである。

この世の事物は、必要に応じて発達もし進化もする。会計も、人の事業の経済活動が単純であるうちは、記録の必要もない。しかし、商業などが拡がり、その交換の媒介として貨幣が使用され、さらに、信用に基づく取引が展開されると、この得意先への債権、また、仕入先への債務の増減につき、記録しておくべき帳簿が実際に不可欠となる。江戸時代に「大福帳」とも言われた。さらに、その売買取引の規模が拡がると、例えば、14世紀以降、ヴェニス商人たちによる活発な国際的な営業には、組織的な簿記が必要となった。ルカ・パチョーリは、若きころ、その有効な実務に親近して、その複雑な記帳にひそむ秩序に感銘したので、その著書にこれを開示した、と推定される。

およそ、人の事業、ことに企業における経済活動は、会計では取引というが、その内容をなす事物は各種各様である。しかし、貨幣経済となれば、すべての取引の量は、金額に還元され得る。その金額は、貨幣制度が異なれば、その質も相違するが、同一制度下であれば、均質の量だけの領域である。ここに数理が全般的に妥当れされうる。よって、比較が徹底的に可能となり、成果が総体的に判断されうる。このように、数理が十分に適用される領域結え、その「スムマ」(数学大全)にも包含された。「数理程、この世で確かなものはない」と、その簿記編でも宣言する。

さらに、各事業において千差万別もする取引の内容は、量と共に質の問題がある。同じ金額でも収入と支出とでは、その質が相反する。その多種多様にわたる取引の質は、すべて幾つかの科目に分類される。しかも、それらの特定科目および金額の各取引全体として包括すれば、自ずから、相対するグループのいずれに分配される。それを「スムマ」では、けだしヴェニス商人の実践をふまえて、仕訳帳では、“per(～から):a(～へ)”と対比させ、元帳では、“debitori(借方):creditori(貸方)”と記号した。それを、のちに、フランス語では、“doit[devoir]:[doit]avoir”、また、ドイツでは、Soll[Geben]:[Soll]Haben”と、全帳簿を通じ、カッコ[]内を省略して表示する。イギリスでは、“Dr.(debtor):Cr.(creditor)”と標榜し、わが国では、「借方」と「貸方」と訳出したことも周知の所であろう。

かの「スムマ」における簿記の説明で、仕訳され勘定された各科目の合計金額が、借方と貸方とで一致することを表示して、かく記す、「神への賛美と栄光のために(a snilande at gloria)」と。その「借方」・「貸方」は、もはや文字通りの意味ではなく、どの平均の全体にも貫く相対性原理であり、東洋人ならば、ただちに「陰・陽」の概念に気付かれうる。しかし、キリスト教のドグマには、この種の用語を欠く。ルカ・パチョーリがミラノで出版した第二の大著“Divina Proportioni”(聖なる釣合い)も、建築この他器物をあらゆる美しいバランスを図解し、神の栄光を讃仰するが、ついに「陰・陽」の道の指摘にまでは至らなかった。かのゲーテが「複式簿記」を「人のなした最も立派な発明の一つ」(T.W.Goethe, “Wilhelm Meistwrs Lehrjnhre, 1823)と賞賛したが、この哲学者も「陰・陽」に相当する言葉が出るに至らなかった。しかし、わが国で、学生たちに「複式簿記」を教授するのに、この質の領域は、「陰・陽」として説明すれば、実に迅速に了解されて十分に会得されうるのである。

また、この組織的な簿記として、各取引を「仕訳する」働きと、「勘定する」働きとは、また、陰陽の対照となっている。千態万称の具体的な取引を抽象的な特定科目と金額に還元すること(仕訳)と、それを各科目の口座ごとに整頓すること(勘定)とは、前者は男性的な働き、そして、後者は女性的なそれと、認められ得よう。この両帳簿は、コンピューターによって、同時にインプットされるが、この両種の記録集団の存在が実務上も必要である。なお、「スムマ」では、この仕訳帳と元帳の前に、わが国では「日記帳」と訳している“Memoriale”を必要としているが、これは、その当時、多種の貨幣による取引で換算が要請されたことと、領収書・送状などの証憑書類の作成が未発達であったため、やがて、この備忘録は「イタリア式簿記」としても廃止去れ、諸種の証憑綴としては残存される。

これに対し、一般に営業が定着するにつれ、その会計も、仕訳と勘定とを経た決算から、貸借対照表・損益計算書、等の財務諸表の作成が要請される。この学術上の手続指示は、けだし、17世紀初頭、オラ

ンダのシモン・ステヴィン(Simon Stevin)の著書、“Wisconstige Gedachtnissen(数学覚書)”に始まる。これもヘーグの図書館で内見した分厚い数学書であるが、その一編に「イタリア式簿記法(Vorstellicke bouckhouding op de Italiaensche wyse)”があり、底にその決算手続の指示があり、1607年に当編だけをフラン語解説をつけて再刊された。すなわち、現実事業の会計手続はその経済活動の発達と共に進歩し、展開されてやまないが、それらをあらしめる量への数理および質への陰陽の原理は全般的に貫徹され不変とされる。

僧侶としてのルカ・パチョーリは、イタリアの諸大学において、複式簿記を含んだであろう数学を講義したが、自らは決して数学者などとは名乗らず、「修道士(Fra Luca)」の他には、ときに、遺言書などで、「神学教授」と肩書きする。この現世むけの「数学」も、宇宙の秩序として、神の構成を表現するものとされるゆえである。彼は諸事業の開発に寄与した。そこで、彼に対する評判も当時から少くない。「野心家」居な「実直型」、等々、相反する意見も多い。しかし、そのどの人にも共通した見方、いな、見られ方が一つある。それは、「敬虔な人」であることだ(Brown & Johnson, *ibid.*)。確かに、彼は、自ら書いた遺言書のへき頭に、「この世のすべてが無に帰すること」を弁え、「いと高き行者」を慕うてやまず。また、その「簿記編」にも、「人は仕事をすべて神の御名において始めなければならない」として解説にかかる。この立場は、当時の時流に添うものではなかった。したがって、前節に挙げられたアルベッティその他の人物のように「ルネサンスノ英雄」としては唱われなかったであろう。しかし、彼の数学には、いまなお、会計などの進歩を無尽蔵に支持してやまないものがある。

いまや、地上の文明は、その末端までも開華されつつあるが、人は本来敬虔さを失つて、その全面的な行詰まりに突進みつつある。ここに、近代文化がながく無視してきた現実をあらしめてやまない根源によく覚醒すべき秋である。ここに、この「会計の祖」の基本態度がこの上とも尊重され、現実の事業を導く会計などの正常な発達にいよよ貢献すべきであろう。ことに、わがくに古来の神ながらなる伝統は、これをよく抱擁し育成しうる。

[以上]

ご講演当日、先生の御著『原文対照—パチョリ遺言書』(マイクロ経理、昭和48年)と『ルカ・パチョーリの生涯』(マイクロ票簿、昭和52年)の2冊、各3部をご持参され、本会に御寄贈いただきました。紙上をお借りしてお礼申し上げます。

なお、この寄贈書を含めてパチョーリ関係資料が大分整理されてきましたので、皆様のご利用をお待ちしております。



イタリア旅行記

1992年晩秋

戸田礼子(税理士)

1 フィレンツェにて

今年は3回もイタリアを旅しました。1回目は夫と一緒に観光旅行、2回目はイタリア語研修国際交流で歩き回り、3回目は国際交流の他にある目的を持った旅となりました。

行く毎にまったく違う天候に驚きましたが、イタリアへの親愛はより深まりました。

2回目にあたる10月の旅でホテルを経営するオルナンドさんの顧問会計士(commercialista)二人にインタビューしました。(この模様については東京税理士会品川支部報に発表しました。)その折りに、現在でもフラ・ルカパチョーリが会計を志す人に対し、その人物と理論が最初に教えられる偉人と聞かされました。中西旭先生が、サンセポルクロの名誉市民賞を受けている事を告げると、靴から収入印紙を出して「これがパチョーリの印紙(marca pacioli)と呼ばれ、実際に使われているものです。一番上がチチョーネ、弁護士の資格を表し、二番目がcommerciali sti、三番目がルカ・パチョーリ、会計士(ragioneri)の資格を表しています。」との説明でした。

翌日、この印紙を買い求めてフィレンツェ市内の大きな郵便局へ行きました。高いステンドグラスの天井、大理石の机、床、アーチ形の柱、まるで博物館か宮殿のような局舎が現実に機能しているではありませんか。なんと素晴らしいことでしょう。観光コースではないので、日本人は一人もいませんし、英語も通じません。他の図柄の印紙しかなかったので建物の写真をパチパチ撮影していたら、守衛さんに「ノンノン」と指を立てられてしまいました。郵便局を出たところに小さな煙草屋があり、そこで同じ図柄で 500 リラ茶色、2000 リラ赤色、3000 リラ緑色の三種類あるのを知り、安いほうを 30 枚買いました。

店を出ると雹(ひょう)が音を立てて降ってきました。10月のフィレンツェの空は青空かと思うと入道雲がもくもくと出て、そこに急に黒雲が立ち込め土砂降りの雨となり、そして 10 分もすればサッと上がり、雲の切れ間から日光が線を描く。それが夕陽だったらもう絶品で、まさにイタリア絵画の空です。



2 ベニスにて

一回目のベニスは八月でカラカラ天気、真っ青な空の下。サン・マルコ広場で懐かしの映画『旅情』にまねて、エスプレッソを飲みました。二回目は 10 月で、大水が出て、広場は 10 センチ以上冠水し、ガラス工芸で有名なムラノ島は、素足で歩きました。三回目の 11 月は曇り空でしたが、いずれもベニスはそれなりの趣があって美しく、自動車や電車の騒音がない世界は現実離れの感があります。

11 月 25 日、ベニス大学の日本文化研究室を訪問しました。赤煉瓦の建物に囲まれた小さな広場の水の下で待っていると、まもなく上品な紳士が来られました。”PIACERE“と挨拶しようとする、「ようこそ、いらっしゃいました」と美しい日本語で先に挨拶してくださいました。聞けば日本の神道を研究しているとのことでした。大学の図書室には、日本の古典から明治文学までが揃っており、ファッションモデルのように美しい女性たちが、真剣に日本語の勉強をしていました。その中の一人が、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』を声を出して読んでくれました。少し顔を赤くして。

その教授の研究室は、天井に胸をはだけた女性が描かれており、お城の小部屋のように、日本とはずいぶん違うなと思いました。またどの教室の窓も、ベニスのあの美しい運河を映す大スクリーンなのです。神道学者と伺ったので、「中西先生をご存じですか？」と持っていた『ルカ・パチョリの生涯』を見せるとにっこり笑って「中西先生のお名前はよく存じ上げています」と話されました。後日に本をお送りする約束をしました。ベニスでの 1994 年のスナ出版 500 年祭の事を聞くと、「そんな先の事はイタリアでは何も分からない。日本人はなんて気が早いんだろう」と笑って答えられました。

その夜、パドバのシェラトンホテルで地元の会計士会の会長に 10 月にフィレンツェで聞いたことこついでインタビューしました。すると「これは非常に真面目な内容なので、判然としない数字などは後日必ず調べて FAX します。」とのことで、またベニスにおけるスナ出版 500 年祭の事についても、分かり次第 FAX して下さると約束してくれました。日本から持っていって下さるやさやかなお土産を渡すと「こちらは何も用意していませんので申し訳ない」と言われかえって恐縮してしまいました。

イタリアの会計士にインタビューしていつも感心するのは、誠実でこちらが納得するまで忍耐強く説明してくれることです。これもエネルギーの違いでしょうか。

3 コルチナにて

テレビ出演が決まり、イタリア人新聞記者のオ・デ・エミアさんとパドノからコルチナに向かいました。コルチナはベニスの北方にあり、まるでスイスのような山間の美しい町です。美術館で日本から用意していた着物を着て、茶箱にてお茶を点てました。寒中を 10 人程がお客様として集まってくれました。生中継と言われていたのですが、いつからカメラが回っているのかまったく分からず説明をしながら一通りのお点前を終え、ほっとしていると、目の前にカメラがきて、「大きなレンズね」と思いつつのぞき込んでいたら写ってたらしく、紹介が始まりました。「どうしてコルチナでお茶を点てたのですか」と聞かれ、「日本人はイタリアが大好きで、音楽でも美術でもよく知っていますが、日本からの文化情報はあまり入っていないと思い

ますので、草の根国際交流としてお茶を点てました。」と答えました。そして来伊した理由として、日本パチョーリ協会が昨年設立された事、会員は 50 人ぐらいで、1994 年のルカ・パチョーリ生誕 500 年祭には 30 人程でイタリアを訪れる予定で楽しみにしている事等を話しました。『パチョーリの生涯』が大写しになり、パチョーリの絵の所を開くと日本人が書いたことがわかるようにページをめくるように言われ、そのようにしました。(このテレビ中継は 1993 年のお正月番組として再放送され、イタリア全国紙にも載りました。)

4 サンセポルクロにて

英語の話せる医学生と、そのお父上と自動車でサンセポルクロに行きました。秋の田園地帯は美しく、背の高い・糸杉の木と低くて丸い木の遠最はまさにレオナルド・ダ・ヴィンチの「受胎告知」の背景でした。サンセポルクロは古い町並みがあるまま残る静かな所で、入り口に“UFFICIO TURISTICO”の矢印がありました。これもまた女優さんのように美しい人が早口のイタリア語で説明してくれるのですが、さっぱり分からず、医学生が英伊通訳をしてくれました。日本を発つ折りに依頼されたピエール・デラ・フランチェスカの絵を描いている日本人画家の住所氏名を聞くと、「それは私の友人です」と彼女はすぐに電話を掛けてくれましたが、パリに行っていて不在中とのことで住所と氏名(Yoshiteru Nonura)を教えてくださいました。

そこで地図を買い、一人一枚しか貰えないというピエール・デラ・フランチェスカ没後 500 年祭のパンフレットを、日本パチョーリ協会の土産に多めに貰いました。イタリアでは、諦めずに交渉すると、熱意の表れと好意的に受け取られ、融通をきかせてくれます。

また彼女は地図に、ルカ・パチョーリの生家や彼の名のついた高校等に印を付けてくれました。

地図を見ながら商業高校に行きますと、入口が開いていたので、リュックサックをしょったままトコトコ入って行きました。するとアーチ型の天井の廊下の突き当たりにルカ・パチョーリの黒い銅像が置いてありました。その背後には 1494 の文字だけが私に理解できる幕がかかっていました。喜んで写真を写していると、背の高い先生らしい人が階段を降りてきました。嬉しくなって自己紹介をすると、相手も医学生もびっくりした顔をしているので、どうしたのかしらと思ったら、私はうっかり日本語で話をしていました。彼に日本パチョーリ協会の事を話すと、「ルカ・パチョーリ生誕 500 年祭の公式出版物を出す人を呼んできてあげましょう」と言い探しに行ってくれましたが、あいにく不在でした。「直接連絡をとれば、きっと本を送ってくれるでしょう」と住所と氏名(Pancrazi Mario)を書いてくれました。銅像の前で記念撮影をしてお礼を言って別れました。パチョーリの生家は、道は間違っていないようなのですが、見つかりませんでした。

市役所前に行き、ルカ・パチョーリ記念碑を背景に写真を撮りました。somo contenta(私、満足です)と言うと、医学生もsomo contentoと言い、駅まで送ってくれました。

4 終わりに

晩秋のイタリアには柿がなっていました。その昔、日本がイタリアから海法等を学び、お世話になったお礼に贈ったそうです。対日感情はとでも良く、道を聞いても何をお願いしても、こんなに親切にして頂いて良いのかしらと思うことばかりでした。私は絵を描きますが、エネルギーの違い、対象を立体で捕える感覚はすべてに通じています。自己主張の強さも含めて、天才の生まれる土壌を見る気がしました。今回の旅では公認会計士の寺坪先生を始め多くの方々の暖かいご鞭撻で充実した旅となりました。また、長年国際交流に携わっていらっしゃる奥井弥栄子先生とイタリア人新聞記者のピオ・デ・エミリア氏には一方ならぬお世話になりました。イタリアの方々の本当の厚いご協力に感謝しつつ筆を擱きます。

[3ページと8ページにあるイタリアの収入印紙は戸田礼子先生が提供して下さったものです。次回フォーラムの折、配布を予定しています。]